

教えて！米子城

第16回

米子城の石垣について



同じ中学校に通う同級生、戸山ミナちゃんと平山ジローくん。米子の歴史や文化（カルチャー）のことにくわしいかるちゃんといっしょに米子城の魅力や謎に迫ります。今回は、米子城の石垣について学びます。

かるちゃん：今回は「米子城フォーラム」や関連イベント「米子城跡ライトアップ」にちなんで、石垣のことを少し勉強してみよう。

ミナちゃん：同じ米子城でも、場所によって石の形や積み方に違いがあるわね。

かるちゃん：そうだね。石垣の種類は基本、自然石をほとんど加工しないで使う野面積、石材を打ち砕いて表面を滑らかに加工し、石材同士の隙間を減らしつつ間に小石を詰めて整える打込接、石を完全に加工して、石材同士の隙間をまったくなくす切込接という3種類の加工技術と、さまざまな大きさの石を自由に積む乱積、ほぼ高さのそろった石を並べ横の目地が通るように積む布積という2種類の積み方があるって、その組み合わせで6パターンに大別されるんだ。これらは時代とともに変化するので、築城や石垣改修の年代を知る手がかりにもなるんだよ。

ジローくん：ちなみに天守台の石垣はどうなんだろう。ある程度加工した石を使ってみただけで、ランダムに並んでいるので打込接の乱積かな。

ミナちゃん：四重櫓の方は、天守台よりも石の表面が滑らかだし、石同士の密着感があるので切込接。積み方は、目地のラインが通ってないので乱積ね。

かるちゃん：二人とも正解。そういう目で石垣を見ていくとおもしろいよ。それから、石垣の角の部分を隅石っていうんだけど、角っこは崩れやすいので、長辺が短辺の2～3倍ある細長い石を互い違いに積み上げて強度を確保しているんだ。その形が、算盤が伝来する前に計算に使われていた算木という棒に似ているので算木積と呼ばれているんだよ。

ジローくん：あの時代に、何百年も崩れない石垣をつくる技術ってすごいよね。

かるちゃん：算木積は天正年間（1573～1592）に始まり、慶長10年（1605）頃完成したといわれていて、その間にすごく進化している。だから、算木積の完成度で石垣の築造時期を推測することもできるんだ。

ミナちゃん：手作業で石を切り出したり加工したりすること自体がすごいことよね。

かるちゃん：石にノミで矢穴と呼ばれる穴をあけ、そこに鉄の矢（クサビ）を打ち込んで割っていたんだ。石についた歯形のような跡がその名残だよ。

ジローくん：それってガイドウォークのときに聞いたことがあるよ。矢穴のついた石が石垣に使われていたり、割り損ねた石が放置されていたりするんだよね。

かるちゃん：まさに「石積みには技あり、石垣に歴史あり」だ。石垣のことだけでも話は尽きないね。これから秋本番というところだけど、11月5日（土）、6日（日）には、いつもと少し違った角度から米子城と城下町の魅力を満喫できる「米子城わくわく遊日和」が開催されるし、その前の10月には、米子市観光協会主催の城下町の小路を巡るウォーク（10/8）や城山の石仏を巡るイベント（10/21）などもあっておもしろそうだね。

ジローくん・ミナちゃん：これからの季節、ますます広報よなごや市ホームページのイベント情報から目が離せないね！
いよいよ文化の秋に突入です。米子城と城下町関連のイベントも目白押しですね。次回もおたのしみに！

（米子市教育委員会 文化課）



天守石垣（打込接・乱積）



四重櫓石垣（切込接・乱積）



矢穴の残る石（鉄門）